

人と人との距離

杉本 元信

東邦大学医学部総合診療・救急医学講座教授

時々、人と人との間の距離について考えることがあります。「人間」の語源は、仏教語の「人の世」「世間」に発しているそうです。人はこの世に生を受け、多くの人と接して成長していくので、「人間」は成長段階での人と人との「距離」に無関係ではないようです。

私事になりますが、私が生まれ育った秋田県湯沢市は山紫水明の地で、小学生時代を伸び伸びと過ごしました。人と人との距離は程よく感じられたものです。1960年から東京に移り住みましたが、当時渋谷や新宿の街は喧騒に溢れていて（今も変わりませんが）、私には毎日がお祭りのように感じられました。私は1972年に東邦大学を卒業し、1982年からUCLAに留学しました。LAでは人々はゆったり暮らしていました。車で市街地を走ると車間距離は広く、街のスーパーマーケットなどで他人と肩が触れると“excuse me!”と言います。2年間の滞在でしたが、帰国すると東京の街は驚くほど道幅が狭く、歩行時は自転車かぶつかって来るような怖さを覚えました。人間の距離感は住む環境によって異なり、人々は環境に順応して生きているのだと思います。

世界の人口は過去50年で2倍に増え、2011年10月31日、70億人に達しました。世界人口白書2011によると、2050年には93億人になり、21世紀末には100億人を超える見込みとのことです。人口分布を地域別に見ると、アジアが42億人と最多で、世界の60%を占めます。アフリカは10億人ですが、今後急速に増加し、2100年には36億人に達する見込みです。国別で最も人口が多いのは中国ですが、インドの増加が顕著で、2021年に14億人に達し、中国を追い越すと推定されています。グローバルな視点から、気候変動や資源不足、貧困は深刻で、これら諸問題への対策が重要課題です。

一方、わが国の人口は、5年に1度の国勢調査では、2010年10月1日現在国内に住む日本人は1億2535万8854人で、5年間で37万1294人（0.3%）減少し、本格的な人口減社会になりました。65歳以上は前回より2.8%増えて

23.0%となり、世界で最高の数字です。2012年は私ども「団塊の世代」が65歳になるので、高齢者は今後さらに増加していきます。先頃の成人の日、2012年の新成人は統計史上初めて減少したと報じられました。まさに少子高齢化社会の到来を実感します。アメリカは、移民の受け入れと中南米系の出生率の高さなどから人口増が続き、現在の3億1038万人が2100年には4億7802万人になる見通しとのことです。留学の後LAに行く度にスペイン語圏の人々が漸増しており、街で“excuse me!”の音が以前程聞かれなくなっているような気がします。

さて、わが国では数年来、人口に対する医師数が適正かという議論があります。約30年前には医師過剰が懸念されていたのに、最近は一転医師不足と言われ始めました。全国の医学部入学定員が5年間で7625名から8991名に計1366名増員されました。これは医科大学が約13校新設された数字に相当します。そのうえ、医科大学の新設を申請するような動きがあるようです。しかし、医師が第一線で活動できるようになるまで卒業後5~10年かかることを考えると、医師の地域偏在、診療科偏在を是正することが先決です。過剰な定員増や医学部新設によって医師の質が低下する危険性があります。人口減少が進むわが国では、医師の増加によって、近未来に深刻な医師過剰時代が到来する恐れがあるのではないかと思います。患者数と需要に見合った適切な診療科別医師枠が設定され、具現されることが望まれます。

世界に誇れるほど驚異的な増加を示していたわが国の臨床医学論文数が、2005年をピークに減少に転じていることは憂慮すべき事態です。医育機関に勤務する医師が、診療と教育にあたる時間が多くなり、研究できる余裕がなくなってきたことが一因と思われます。教員数は学生数に適合していなければならないのはもちろんのことですが、教員は学生と程よい距離を保ち、研究にあてる十分な時間を持ち、良質の論文をたくさん書くことができる環境を与える必要があると思います。